

【制作ノート】

「風の絆」シリーズのこと

加藤 茂 外 次

風の絆と題された一連の作品を作り始めて随分の時が経った。ある日の夕暮れ窓際で一陣の風に雨の匂いを感じたときこのタイトルは生まれた。風が運んでくる匂いは様々なことを思い出させる。突然の雨や、夕餉の煮炊きをする醤油の匂い、校庭の鉄棒の錆びの匂い、すれ違いざま記憶の片隅にある香水の匂い。そういったものが喚起するイメージは時として重なり合い、光と影による空間となり、油彩と版画のマチュエールに還元されて表出する。作品はそういう思い出や近いモノたち、旅先の風景や出会った人たちをモチーフにして、風が取り結ぶ絆として描かれる。

1996年に始まったこのシリーズは当初銅版画によるもので2版3色で制作している。(図版1) この作品はバリ島の割れ門のイメージを中心に浮遊するガラス球、花、壁を構成要素にしている。銅版画の中で調子の表現をどうするか試行錯誤していた時期であり、さまざまな技法を試みていたが、結局アクアチントで松脂を温めたあと、油性のクレヨンでネガティブにデッサンしていくことで調子を作ることができた。ネガティブにデッサンすること(明暗を反転して描くこと)は慣れないと難しいが、うまく描けば版の上に写真のネガのような調子が出来上がる。また背景の壁のイメージは写真製版で作っている。かねてより銅版の写真製版は得意とするところであった。銅版画ではアクアチントのマチュエールは写真と手描きデッサンのイメージを柔らかく統合してくれる。この後の銅版画の作品はほとんどこのアクアチントによるデッサンと写真製版を組み合わせる方法で作っている。この銅版画のシリーズは背景に砂浜

などの風景や静物を配した作品（図版2）と続いていくが、次第に植物と円弧を中心とした形だけになっていく。（図版3,4）これはできるだけ構成要素をシンプルにし植物の持つ有機的な形と幾何学的な無機的な形を組み合わせ、独自の空間を作ろうと考えていったものである。



図版1 「風の絆」 第70回国展 70回記念展賞
1996 銅版画 60cm×80cm



図版2 「風の絆」 第71回国展 国画賞
1997 銅版画 60cm×80cm



図版3 「風の絆」 第72回国展
1998 銅版画 60cm×80cm



図版4 「風の絆」
2000 銅版画 50cm×65 b cm

さまざまなイメージをひとつの画面の中でどう描いていくか……時として散漫になる画面を統合し意味を与えていくことは常に私にとって大きな問題であった。イメージをひとつひとつの層として重ね、画面を構成し、作品の個々のテーマに沿って層を融合させながら再構築をしていく。大型の作品ではこういう作画方法をとることにした。

最近の小品や中型の作品では風景をひとつのイメージとして描くことが多い。風景はそれ自体さまざまな光彩や匂いや空間のイメージを含んでいる。光と影による色彩構成をすることで小品ではそれ以上にイメージの層を重ねることは避けている。旅先で出会った風景の持つ美しさや空気を表現するためにはイメージを重ねないほうが有効な場合も多い。

いずれにしても、風の絆のシリーズは、私が具象的なイメージをできるだけ素直にかつ自由に表現することを目的としている。イメージは重なり合うことも、単独で現れることもあるが、私はそれぞれの作品が風の絆として繋がっていると考えている。

1998年の油彩「風の装置」から2002年「風の絆」まで（図版5、6、7、8、9）の国展出品作は風の絆シリーズの中でも特に思い入れの強い作品である。ここに登場するのは家族である。1作ごとに娘の少女時代の成長の様子が見て取れ、私の父親としてのまなざしを感じることができる。ここでの主題は家族の絆である。親子、兄妹の絆を画面に留めおきたいという強い願いがこめられている。「風の装置」では子どもたちが自分自身の大空へ飛び立つことを願って、プロペラや気球、竹とんぼなどを小道具に使い、風に乗って羽ばたいていくイメージを表現している。

油彩画では構図を決めた後、下地にホワイトでパートを作ってあらかじめマチュエル作りをする。人物の描写は油彩による下描きの後、テンペラの白でモデリングをしていく方法を取っている。テンペラのハッチングによるモデリングは線の重なりや細さ、テンペラの乾燥時間の早さという利点から人物や衣服などの描写に具合がよく、試行錯誤の末この技法に落ち着いた。人物などの具象的な描写と背景のマチュエルや壁から想を得た平面表現、それを画面上で一つの空間として構成していくことがこれらの作品の背骨になっている。



図版5 「風の装置」
第72回国展
1998 油彩・テンペラ 130号



図版6 「風の装置」
第73回国展
1999 油彩・テンペラ 130号



図版7 「風の絆～飛翔のために」
第74回国展
2000 油彩・テンペラ 130号



図版 8 「風の絆」
第75回国展
2001 油彩・テンペラ 130号



図版 9 「風の絆」
第72回国展
2002 油彩・テンペラ 130号

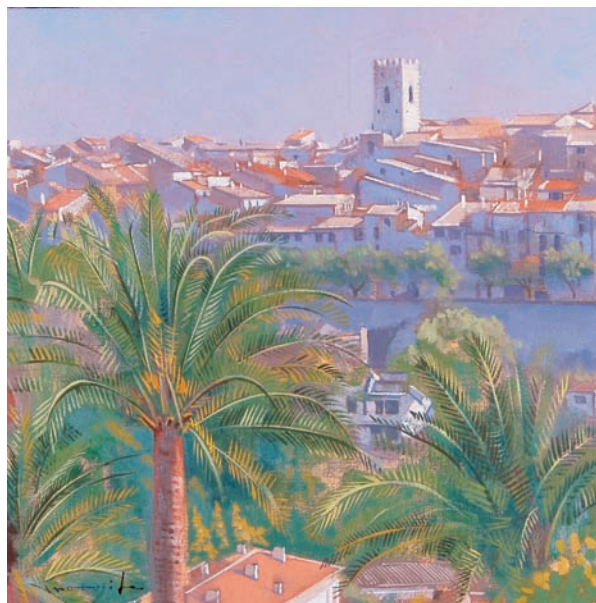
旅もまた風が取り結ぶモチーフになっている。バリ島、イタリア、カナダ、イギリス、フランス、スペインなど取材するたびにその土地の光彩や空気が思い出となって体にしみこんでいく。日常的な香の匂い、ガス入りの水のかすかな刺激、極寒の地のオーロラの光、延々と続く草原の中に霧にかすむストーンヘンジ、地中海の海の青、そしてアンダルシアの風。風景画を描くことは私の中に沁み込むその地の感覚を風景に込めて描いていくことである。

今回の個展（2008年）はフランスのニースとスペインに取材したものを中心に出品した。一連のニースの風景は地中海の光と影を意識して作った作品で「夜明け・出航」（図版10）は日の出前のわずかな時間、太陽の光がオレンジに空を染めて、海岸が人でにぎわう前の静かなひと時を描いたものである。遠景に見える岬と手前の海岸との空間をブルーのモノトーンで空気を感じるように描くことに腐心した。風が風いで時が止まったような一瞬に音楽が響くような作品になればとの思いだった。

ニース滞在中にヴァンスにあるマチスのロザリオ礼拝堂を訪れることはかねてからの念願だった。この教会は壁画、ステンドグラス、法衣に至るまでマチスがデザインし、マチスが晩年精魂傾けて作ったものである。真っ白な壁に墨一色で描かれたデッサン、ステンドグラスを通してマチスの色がやわらかく礼拝堂を包み込む。ここで過ごす静謐で真摯な時間はマチスが精魂傾けた作品ゆえの高みを感じさせるものであった。「ヴァンス遠望」（図版11）は礼拝堂から見たヴァンスの町並みである。息子と娘と共に敬虔な思いを共有したあと、教会の外に出てマチスが見たであろう風景を記憶に留めたい、そんな思いを込めた作品である。



図版10 「夜明け・出航」
2008 油彩・テンペラ 12号F



図版11 「ヴァンス遠望」
2008 油彩・テンペラ 6号S

スペインに取材した作品「朝の光・セゴビア」(図版13)はローマの水道橋で名高い町で、水道橋の上に登り見下ろした街並みを描いたものである。画面左側の外に水道橋があり、朝の光を浴びて街の建物の屋根に影を落としている。私は水道橋を描かずにその影だけを描くことで水道橋の存在を感じさせようと試みた。眩い朝の光、影は明るく、しかしくっきりと水道橋の存在を示している。全体を包む明るい光がこの作品の命である。街も、通りを歩く人々も、カフェで談笑する人も朝の光に包まれて一日が始まる。光の中に次第に街の喧騒が始まっていく。そんな光景を描き出した作品である。

作品「燦燦」(図版12)はアンダルシア地方ロンダの町に取材した。ロンダは町の中心に深い谷があり高い橋が架けられている。橋のある通りがメインストリートになっていて、現代闘牛発祥の地として闘牛場もある。谷を挟んで両側に建物が並び川沿いに降りていくと、牧場や丘陵が見渡すことができる。この作品は夏の陽を浴びて道に影を落とす木々、その道が明るく続いて遠景へとつながっていく。ロンダの町の喧騒から外れた何気ない風景を描いたものである。

作品「アンダルシアの風」(図版14)はスペイン取材を集大成したもので、モチーフにはロンダで出会った少女、谷から見上げた橋の風景、ラマンチャの風車を層として重ね合わせて描いている。自ら風となって駆け抜けたスペインの印象を、人も風景も溶けあってアンダルシアの風となって感じられれば本望である。

ここまで銅版画と油彩の作品を見てきたが、よく言われることに作風が異なっているということがある。これは私自身銅版画を始めたとき版画独自の表現を迫りたい気持ちがあり、油彩と版画のそれぞれの表現を気分を変えて楽しむように作品制作をしていたことに起因するのではないだろうか。とはいえ並行して作っているとアプローチの仕方やイメージが重なりあうこともあり、私としてはより近い表現になっていると思っている。モチーフが異なることと、版画では色の制約があることで油彩とは表現が若干異なるが、根底に流れるものは共通していると考えている。

風をキーワードとしての作品作りは、すべてが私自身の心に触れたものを作

品を通して表現している。油彩や版画という技法もまた、必要に応じたもの、興味を引いたものを心のままに取り入れていくことが風を感じる制作方法だと信じている。技法にとらわれることなく、心のあるままに自在に作品を紡いでいくこと、「風の絆」シリーズは、私と私の思い出たちが織りなす小さな物語となっている。その悲喜交々の物語が、私の作品を見る人たちの心に風となって心に響き、それぞれの風の物語を思い起こす力になってくれればと願うばかりである。

今日アトリエに吹き込む風も、明日旅の空を吹く風も、私の目と心を通して作品の中に光彩を放ってくれることを、そして私自身、風を感じる心を持ち続け、作品を作り続けられることを願ってやまない。



図版12 「燦燦」

2008 油彩・テンペラ 15号F



図版13 「朝の光・セゴビア」
2008 油彩・テンペラ 30号F



図版14 「アンダルシアの風」
2008 油彩・テンペラ 130号F